

人間の思考システムの特徴

人間の思考システムには、じっくり時間をかけ、精緻なプロセスをたどる思考モードと、高速でおおざっぱな思考モードの2つがあることが知られている。このような考え方を総称して二重過程理論というが、ここでは代表的な分類として、Slovic ら(2004)の、分析的システム(前者)と経験的システム(後者)を取り上げる。2つのシステムのうち、日常生活でより優勢なのは、直感と感情主導の経験的システムである。それは人類の長い進化の歴史において生き延びるためには、粗くはあっても素早い判断が必要とされてきたからである。その帰結として人類は子孫を残すことができた個体が存在し、その連続の先にいる末裔がわれわれなのである。文明化された都市社会の中で暮らしていても私たちのリスク認知は未だ経験的システム中心でなされやすい(中谷内、pp.63-64)。せっかくの分析システムも、経験的システムの判断を批判的にチェックするよりもむしろ、それを正当化する形で機能しやすい(Kahneman & Frederick, 2002)。また経験的システムの作動は半ば自動的であり、だれにでも生じるメカニズムとして考えられている。

人類のもつ以上のような思考システムの性質は、リスク認知において主観的リスク認知が頑健であったり、主観的リスク認知と客観的リスク認知が乖離したりする現象の一因として考えられている。

(2)人間の思考システムと信頼性の関係性

このような思考システムの性質をもつ人々に対し、リスクコミュニケーションが実効性を有するには、ステークホルダー間の信頼性が鍵となる。

分析的システムによる分析的判断を活性化させるには、科学的なリスク情報が必須である。このとき重要なのはリスク情報の送り手が受け手に信頼されるようなリスクコミュニケーションを実施することである。そのような情報の提供の仕方は、受け手に「公正」だと感じられる要素を含むメッセージ内容、プレゼンの仕方である。具体的には、「科学的根拠に基づいている」、「隠蔽感がない」「開示をしている」、「平明な表現である」、「相手を尊重した話し方をしている」、「情報の受け手に発言の機会がある」という要素がリスクコミュニケーションの「公正性」を感じさせ、その結果、リスク管理者への信頼感が醸成されるのである(e.g., 竹西ら、2008)。

しかし、細心の注意を払って理想的なできばえのリスクコミュニケーションを行ったとしても、リスクが受容されるとは限らない。それはリスク認知は直感的判断や感情に主導される経験的システム中心になされやすいからである。例えば、「人工的なもの」という言葉が「何となく不安」と判断される傾向はこのシステム故であり、その判断は思いの外、強固なのである。

しかしこのような判断に対しても信頼性が功を奏することが知られている。リスク管理者に対する信頼性が高いと、リスク対象のベネフィットは大きくまたリスクは小さいと認知され、その結果リスク対象の受容傾向は高くなる(Siegrist, 2000)。

以上をまとめると、信頼性は分析的システムにおいてはリスク情報の認知過程に作用し、経験的システムにおいては「なんとなく」感じられている不安や疑問の低減に作用する、重要な役割をリスクコミュニケーションにおいて果たしているのである。

(3)判断の二重性とリスクコミュニケーション

以上を総合し、2つの思考システムをもつ存在としてわれわれを位置づけるなら、リスクコミュニケ

ーションの留意点は以下のようになる。

食品分野のリスクは、社会的議論と個人的選択の分類軸では、後者の色彩が強い。従って、リスクコミュニケーションの目標は、リスクを踏まえ、一人一人が自分で行動を選択できるように支援することである。そのためには、リスクコミュニケーションはその判断の根拠となる必要な情報をえられるようなものとすべきであり、その内容は信頼性の源泉たる公正さを満たす要素から構成される必要がある。

しかし人間は以上のような分析的思考による判断のみで生きるにあらず、直感や感情に主導される経験的システムによりリスク判断を為す存在であり、むしろ食品分野のリスクのような日常的リスク判断においては経験的システムが優先することをリスクコミュニケーションの従事者は心得ておくべきである。これが主観的リスク認知など、適正なリスク判断の妨げになることが多い。しかしこのシステムにも信頼性は寄与し、特にリスク管理者への信頼が受け手のリスク受容に影響を及ぼす。

(金川委員提出)

参考文献

- Kahneman, D., & Frederick, S. (2002). Representativeness revisited: Attributive substitution in intuitive judgment. In T. Gilovich, D. D. Griffin & D. Kahneman (Eds.), *Hueristics and biases: The psychology of intuitive judgment* (Pp.49-81), Cambridge University Press.
- 中谷内一也編(2012). 『リスクの社会心理学 人間の理解と信頼の構築に向けて』 有斐閣
- National Research Council (1989). *Improving risk communication*. National Academy Press.
- 日本リスク研究学会 (2000). 『リスク学辞典』 TBS ブリタニカ
- 岡本浩一・今野裕之編 (2003). 『リスク・マネジメントの心理学 事故・事件から学ぶ』 新曜社
- 酒井泰弘 (2007). 「経済学におけるリスクとは」 橋木俊詔・長谷部恭男・今田高俊・益永茂樹 (編) 『リスク学入門1 リスク学とは何か』 岩波書店, Pp.55-85.
- Siegrist, M. (2000). The influence of trust and perception of risk and benefits on the acceptance of gene technology. *Risk Analysis*, **20**, 195-203.

Slovic, P., Finucane, M.L., Peters, E., & MacGregor, D.G. (2004). Risk as analysis and risk as feelings: Some thoughts about affect, reason, risk, and rationality. *Risk Analysis*, **24**, 311–322.

竹西亜古・竹西正典・福井誠・金川智恵・吉野絹子(2008). 「リスクメッセージの心理的公正基準：管理者への手続き的公正査定における事実性と配慮性」『社会心理学研究』 **24**, 23-33.